

# 鈴鹿市玉垣地区における山の神行事

岡野 節子・岩崎ひろ子

## The Yamanokami Mountain Spirit Festival of the Tamagaki Area in Suzuka City

Setsuko OKANO and Hiroko IWASAKI

### 要 旨

鈴鹿市玉垣地区における山の神行事の状況について現地において聞き取り調査を行なった。次のような結果を得た。

- (1) 山の神行事の分布は農村の活性化に関連があり、農村地帯に多い。
- (2) 祭祀場所は神社、または、山の神の祭祀場で行なう。
- (3) 祭祀の実施は玉垣地区は秋1回であるが、土師地区のみ2回実施する。
- (4) 祭祀の供物は赤飯、鶏飯、御神酒、みかん等である。
- (5) 祭祀の象徴である「どんど火」は住宅事情により小さい火に移行してきた。
- (6) 山の神行事は男児が中心に参加するのが原型であるのが、昨今においては子供数の減少により女兒の参加の地域も増えてきた。

### 1. はじめに

玉垣地区は鈴鹿市行政の中心である神戸地区の東南部にあり、市内東部のほぼ中心に位置し市内第5番目の広さをもった人口21800人の地区である。地区内には矢橋、肥田、柳、土師、北玉垣、西玉垣、南玉垣、末広、岸岡、桜島の10町内、29自治会がある<sup>1-2)</sup>。

山の神についての研究は全国的には柳田国男氏をはじめ、三重県では堀田吉雄氏が伊勢市、伊賀町、志摩町を中心に研究および発表の数も多い。また、鈴鹿市においては土師地区についての論述がある<sup>3)</sup>。

昔から農村地域では山の神を祀る習慣があり、古い伝統を守りつづけてきた。しかし、昨今においては中断になったり、廃止したりしてだんだん祭事も簡素化されている。また、行事の内容についても変容している。

今回は、山の神行事が今日まで受け継がれてきた現状を把握することを目的として、鈴鹿市玉垣地区における山の神行事についての状況を現地に赴いて聞き取り調査および実地調査を行なったので紹介する。

## 2. 調査方法

### 2-1 調査方法

玉垣地区29自治会宛に電話によるアンケートを行い、「山の神行事を実施している」と回答を得た自治会（土師・矢橋・肥田・岸岡・西玉垣）について、現地に赴いて聞き取り調査および実地調査を行なった。

### 2-2 調査期間

1996年11月から1998年1月まで行った。

## 3. 山の神について

山の神は生産神として山林業に従事する人達の信仰であるとともに、農耕の守護神でもあったが明治時代になると神社合祀令によって、田道などにあった氏神を神社境内の一隅に合祀されたり、他の石碑とともに一ヶ所にまとめられたりした<sup>9)</sup>。

合祀前は“組”または“瀬古”ごとに祀られて、地域社会の基幹となっていた。ほとんどが「山の神」という文字を彫んだ自然石であり、なかには祠の中に収められているものもある。祀神は、大山祇命（オオヤマツミノミコト）、木花開耶姫（コノハナサクヤヒメ）ともいう。土地によって言い伝えが異なり、男神であったり、女神であったりする。玉垣地区では女神のようであり、1年に12人の子供を産むなどと言われている<sup>3-6)</sup>。

「春に山から里に下って田の神となり、秋の収穫が済むとまた山に帰って山の神になる。」という山の神の属性から、春と秋の2回にわたって山の神の祭りが催されるのが基本的な形態である。「七」という数が山の神の特性と結びついているので、春は1月7日、秋は12月7日が「山の神の日」とされてきた<sup>6)</sup>。最近では祭りにいちばん近い土曜日・日曜日に当てられる地域が多くなっている。

供物は地域により異なるが餅・シトギ・御神酒が主たるものである<sup>7)</sup>。沿岸部ではオコゼという魚が供物とされてきた。その一つに尾鷲市矢浜では今でも昔のままが伝承されている<sup>8-9)</sup>。

鈴鹿地区では1月7日の山の神行事に「どんどの火」<sup>10)</sup>を焚くところが多い。「どんど火」は小正月の火祭りで「左義長」とも言われ、正月の地域行事のひとつであった。地域によっては福粥（大豆、米、鏡餅を切ったもの）を炊き、稲の作付けの占いをする風習のところもある<sup>11)</sup>。

また、「どんどの火」に書き初めを燃やし、紙が高く舞い上るほど「天筆があがる」という口伝もある。その後、その火で焼いた餅を食べると「無病息災・家内安全」など、一年中の幸や恵みをひきよせようというのである<sup>6)</sup>。

次に、現在玉垣地区において伝承されている山の神行事について紹介する。また、山の神祭りの状況について表1にまとめた。

表1 玉垣地区における山の神祭りの状況

実施地区	実施場所	実施日時	山の神の数	供物
西土師町	西土師神社	11月30日18時	石・1個	みかん・御神酒・鶏飯のおにぎり
中・東土師町	土師神社	11月30日18時	石・1個	御神酒・鶏飯のおにぎり
矢橋町	矢技神社	12月1日5時	石・2個	御神酒・重箱の赤飯・鏡餅
肥田町	宇気比神社	12月1日19時	石・5個 祠・1個	御神酒・藁筒の餅・アルミ伯に入れた赤飯 みかん
岸岡町	貴志神社・山の神の祭場	12月7日17時	石・1個 祠・1個	御神酒・鶏飯のおにぎり 御神酒・鶏飯のおにぎり
西玉垣町	集会所	12月14日18時	石・1個	御神酒・赤飯

### 3-1 土師地区の山の神

この地区の山の神は西土師と中・東土師の2箇所祀られている。11月30日に祭事が行なわれる。中心になるのは東土師で一週間前から大人達が神社の境内に出かけ、今年できた藁で2つの小屋（男児用・女児用）作りを行なう（写真1）。山の神の当日になると、子供達が集まり籠をひいた2つの小屋に各自が入り、ろうそくの明かりをたよりにして菓子などを食べながら遊ぶのである。その近くでは大人達が神木を寄せ集め「どんど焚き」をする火の明かりも加わり子供達は夜でも明るく遊ぶことができる。やがて母親達が集まり供物の鶏飯でおにぎりを作り子供達に供する。大人達は火にあたりながら、御神酒や鶏飯のおにぎりの直会をいただく。この地区の「どんど焚き」は玉垣地区のなかでも最も天高く燃え上がる火勢であった。

西土師地区では中・東土師地区よりも厳かに行われていた。子供達は神社の拝殿で母親達が作る鶏飯のおにぎりを夕食としていただく。大人達は神社の境内にある神木の寄木で「どんど焚き」をする。古くは西・中・東土師と一緒に本行事を行っていたものが、ある時期、西土師に疫病がたえず、村人は苦しんだため、この地区だけが他地区から分離して、厳かに行われるようになったそうである。

#### 3-1-1 土師地区の竹の山の神

玉垣地区の中では土師地区のみ竹の山の神行事が珍しく伝承されている<sup>19)</sup>。1月6日の18時から土師神社の境内で「どんど焚き」が行われる。そこで燃やされる柴は前年の11月30日の山の神の男・女児の小屋作りに使った藁を燃やす。竹で骨組みが組みたてられ、回りを藁で覆い宮世話によって火がつけられる。住民達は時刻になると、神社の境内に正月の鏡餅を1cm程の厚さに切ったものを重箱に入れ、焼き網と一緒に持ち寄り、それぞれが「どんどの火」で餅を焼く。藁を燃やしたおき火で餅を焼くとふっくら焼き上がる（写真2）。この餅を翌朝（1月7日）の七草粥の中に入れると「年中万病なく暮らせる」と、住民達は火にあたりながら焼きあがった餅を食べていた。これを縁起餅という。

### 3-2 矢橋地区の山の神

この地区の山の神は早朝から行われる。前日から境内には神木の寄木が準備され、早朝、総

代により火がつけられる。近くの農家から集められたさつまいもを火の中に入れて焼く。5時半頃に子供達も集まり焼きあがったさつまいもを食べる。信仰ある住民が炊きたての赤飯を重箱に詰めて参詣する。続いて子供の母親達が集まり、「山の神」に供えられた赤飯でおにぎりを作り拜殿で朝食をとらせる。子供達が食べ終わると「どんど火」が消され、子供達は町のお寺へ移動して遊ぶ。お昼になると母親達は鶏飯を炊き、子供達に昼食をとらせて解散となる。大人達は山の神祭りの祭祀場の後かたづけをし、鏡餅、御神酒、みかん等の直会をいただき、この行事を終了する。

### 3-3 肥田町の山の神

この地区は5ヶ所に山の神が祀られ、さらに、氏神にも祠の山の神が祀られている。祭りに参加するのは男児（小1～小6）が中心となり、昼食後から講宿へ集まり山の神の準備や遊びをする。夕方になると男児達は山の神料理である鶏飯、卵焼き、サラダ、唐揚げ等をいただく“大将”（小学校6年生の男児）は1週間前になると町の長老宅へ青竹を持って“ぼんでん”作りの依頼に行く<sup>14)</sup>。“ぼんでん”とは長竹や棒に、紅白や黄・青色など極彩色の紙や布を数多く飾りつけたもので、男の“ぼんでん”と女の“ぼんでん”があり、男の“ぼんでん”には白の御幣をつけ、女の“ぼんでん”には赤の御幣を中心に黄色・緑色・紫色の御幣を飾りつけたものである<sup>15)</sup>（写真3）。山の神の祭祀場（氏神社）には、祠の山の神と長老の手により作られた男女の“ぼんでん”が拜殿に祀られる。19時になると

“大将”を先頭に ♪山の神が始まるぞー♪ と町内を唱い（はやし）ながら各家から子供を集める。拜殿には紅白の幕（以前は川の堤防で男竹を50本ぐらい切り取り、垣を作ったものである）の前に祠を安置し、参詣者を前に男児2人が男のぼんでんと女のぼんでんをそれぞれに持ち抱えて、はやし歌<sup>12)</sup>を歌う（写真4）。紅白の幕の後では、前で歌うはやし歌にその他の男児達（幕の後）が返答する。

♪山の神さん よないこ やとうの棒や やかいさか ずきどうさすや♪（意味不明）とはやした後、ぼんでんをかかえて参詣者に向け「これか・これか」と指す。次々じらしながら指していく。紅白の幕の後にいる男児が頃合いをみて「よい」と言う返事をする、その時、指されている人がみかんをいただく。

紅白の幕の前ではやし歌を歌うのに対して、幕の後ではやし歌に返答して、にぎやかにかけあいの宴が行われる。みかんがあたった人には他の参詣者がやんやとはやしたてる。

拜殿一杯に集まった参詣者は山の神行事の終了の頃になるとビニール袋一杯のみかんを各々手に持って家路に急ぐ。男女のぼんでんは翌日境内で燃やされる。どうして、この時にみかんが用いられるか定かではない。子供達による賑やかな直会といえる。

### 3-4 岸岡町の山の神

この地区の山の神は男児（小1～小6）のみで運営されるので、準備のための仕事分担がある。準備とは1週間前から「どんど焚き」の寄木集め、運営資金のための寄付集め、岸岡山にある赤い土、神社の裏山にある黄色の土を取りにいく。これらの土は山の神の祭祀場にまき、一部は供物とされる。もう一方では近くの海岸から砂を運んできて、「どんど焚き」をする場所の穴に入れる。この砂はさつまいもを焼く時に使われる。次に、男児達は山の神の祭祀場に小屋を建てるための支柱の穴を掘り、大人達は小屋組をするなど子供達の仕事を支援する。当日になると集会所では“大将”の母親がリーダーとなって子供達の山の神料理の準備を行なう。

“大将”になれるのは小6で、この土地で生まれ育った男児だそうである。夕食は17時頃から鶏飯のおにぎりや漬物が準備される。夕食には男児に混じって近年は女兒も一緒に参加できるのである。18時になると“大将”が先頭になり太鼓をたたきながら

♪山の神の、夜食や おれのご飯や 侍ごときのないように たもなせたもなせ

山の神♪（意味不明）と唱い（はやし）ながら各家から子供を集める（写真5）。

集会所に戻ってくる頃には、山の神の祭祀場で焼き上がったさつま芋が届けられ、子供達のおやつになる。その後、集会所では男児・女兒達が21時まで楽しくゲーム等をして山の神祭りを楽しむ。

さて、大人達は山の神の祭祀場の小屋ではどんど火を囲んで暖をとり御神酒のおさがりを酌みかわし、供物の一部を肴として直会が始まる。この「どんど火」も21時には消されるのである。この火にあたると無病息災で過ごせると言われ、近所の住民達は火の回りに集まり、談笑する。翌日には町内で山の神の祭祀場に作られた小屋を壊した後、宮司による式典がとりおこなわれ神事は終了する。

岸岡町にはもうひとつ西岸岡町の山の神がある。山腹のこんもりした林の中の小祠に安置され、その前では大人達がどんど火を囲んで暖をとり、供物の一部の直会をいただく。子供達は東岸岡町に合流してにぎやかに楽しむ。

この地域では、子供達は集会所、大人達は山の神の祭祀場とそれぞれが分かれて、山の神祭りに参加する。

### 3-5 西玉垣町の山の神

この地区は町内の山の神を集会所に祀り行われる。前日に男児の各戸へ「赤飯もってこい」と唱い（はやし）ながら、玄関先に赤い土をシャベル1杯ずつまく。参加者はすべて男児（小1～中3）で小3の男児の当屋で1年間預っている山の神の祠を、当日になると集会所に運び御神酒・赤飯・みかんが供えられる。祭事が終わると祠は、再び次年度の小3の男児の当屋に戻され、1年間預かり主の家の床の間に祀り、毎日水を絶やさないようにすることが習わしになっている。

今は住宅が密集化してきたため、「どんど焚き」は行わなくなり、男児（小1～中3）が17

時頃から集会所に集まり、18時になると信仰ある住民が炊きたての赤飯を重箱に詰めて参詣にくる。その赤飯は子供達の夕食となり、山の神の祠を預かっている小3の母親達がリーダーとなり、唐揚げ、サラダ・お浸し、豚汁等の山の神料理を子供達にふるまう。夕食が終わると1km程離れた山の神の祭祀場へ灯明を点しに出かける。12時までは火を絶やさないように男児達が見守る。小学生は各家にもどり、中学生だけが集会所に泊まる。翌日、朝食終了後に解散する。この地区では山の神の石碑に注連縄を巻き安置してある。この点が他の地域とは異なっていた(写真6)。

## おわりに

山の神行事は地域により供物、遊び方、実施日等それぞれ異なる。社会の環境の移り変わりにより、昔の祭事とは異なってきているが、そのいくつかは伝承されている。それらの状況についてまとめてみると

- (1) いくつかの地域では、「どんど焚き」が実施されている。この火を大きくして神を送るのが原型であり、どれだけ大きくしても火事にはならないとされていた。しかし、時代とともに火もなるべく小さくしてきている。これには住宅の密集化が考えられる。
- (2) 今回の調査の対象である玉垣地区の山の神分布は、昔から穀倉地帯であった地域に多く伝承されている。このことは、農村の活性化に関連があるように思われる。
- (3) 山の神行事を行なう場所については、神社に合祀されている地域では神社で行い、それ以外は山の神が祀られている祭祀場で行なわれている。
- (4) 山の神は春と秋の2回実施されるのが原形であるが、今はほとんどが秋に1回である。しかし、土師地区のみ2回(山の神と竹の山の神)実施している。
- (5) 山の神祭りは子供達(男児)が主となって勧進や宿泊なども行い、行事の運営をする。大人達は協力的な立場をとっているのが伺えた。
- (6) 山の神行事の供物は原型は餅、シトギ、御神酒であったが、現在は地域により異なるが赤飯、鶏飯、ミカン等が多かった。また、直会を共にすることは神への親近感と地域住民のふれあいの場でもあることが伺える。
- (7) 玉垣地区の山の神祭りは古くは岸岡山へ赤い土の採取に出かけ、前日か当日に地区の道路や各戸の玄関先に赤い土をまく。また、高岡山へみかんの購入に出かける等、共通点がある。しかし、これらも時代とともに変化してきている。今でも赤い土を取りに出かけているのは岸岡と西玉垣地区のみであり、みかんの購入は近所のスーパーで済ませる等、時代による祭事の簡素化が伺える。

娯楽の少なかった時代には、若者達が仲間同士集まり定例会をもち、その後、共同飲食をして親睦を深めた<sup>17)</sup>。今では他に娯楽の機会も増え、若者達は現代的な娯楽へと移っているようである。玉垣地区の山の神行事は農耕儀礼との関係も深く、神仏への信仰も相まって継承されてきた。また、子供達(男児)は上級生から行事を通じて、地域のこと、地勢、

つきあい方、しきたり等について学習や体験をするとともにコミュニケーションのよい機会でもある。現在は時代とともにより本行事も変化しているが子供達のふれあいの場として、この時ばかりは自然体で生き生きと参加しているようであった。

## 謝辞

今回聞き取り調査において、土師、矢橋、肥田、岸岡、西玉垣地区の方々をはじめ、地域住民の皆様にたいへんご協力をいただきまして、心から感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 伊藤俊一(1995)：鈴鹿の地名，P.81，中日経済新聞社
- 2) 玉垣実行委員会編(1992)：我がまち紹介，p.52-53，玉垣実行委員会
- 3) 堀田吉雄(1966)：山の神信仰の研究，p.47-50，伊勢民族学会
- 4) ふるさとまつり推進事業編(1994)：ふるさとのまつり，p.102-103
- 5) 桜井徳太郎(1993)：神々のフィールドワーク，p.69，法蔵館（東京）
- 6) 堀哲(1978)：三重の文化伝承，p.162，伊勢民族学会
- 7) 三重フィールド研究会編(1982)：三重県の伝統料理，p.183，三重県良書出版会
- 8) 佐藤芝明(1996)：現代に生きる山の神伝承，p.35，中央公論事業（東京）
- 9) 中日新聞(1997)：12月8日朝刊
- 10) 宇井邦夫(1996)：山の神とオコゼのはなし，現代フィルム（東京）
- 11) 宮田登・萩原秀三郎(1985)：催事百話，p.220，ぎょうせい（東京）
- 12) 菰野町教育委員会編(1997)：菰野町史 下巻，p.567-568，第一法規（東京）
- 13) 杉本弘次(1992)：鈴鹿の歴史，p.367，社団法人 鈴鹿青年会議所
- 14) 大島暁雄(1993)：民族探訪辞典，p.381，山川出版社（東京）
- 15) 柳田国男(1994)：民族学辞典，P.212，東京堂出版（東京）
- 16) 日比野光敏(1995)：岐阜市歴史博物館研究紀要，p.84
- 17) 桜井徳太郎(1994)：民間信仰辞典，p.300，東京堂出版（東京）

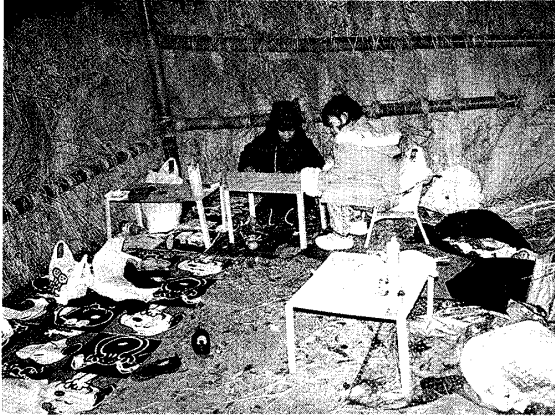


写真1 土師地区の山の神祭り  
藁の小屋の中で遊ぶ女兒達

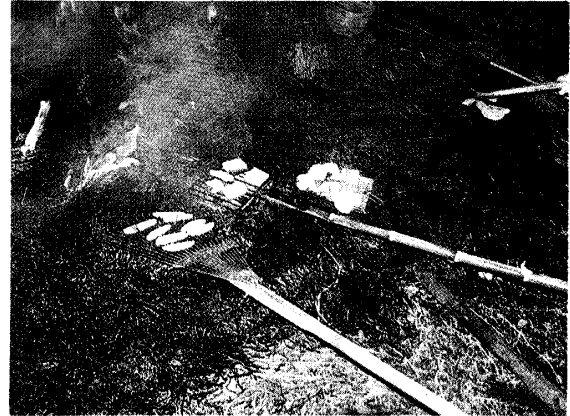


写真2 土師地区の山の神祭り  
「どんど焚き」の火で焼く餅

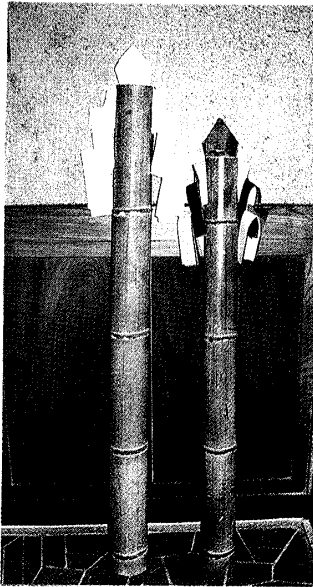


写真3 肥田地区の山の神祭り  
男女のほんてん



写真4 肥田地区の山の神祭り  
男女のほんてんをだき抱えながら  
はやし歌を歌う



写真5 岸岡町の山の神祭り  
はやし歌を唄いながら子供を集める



写真6 岸岡町の山の神祭り  
他の地域と異なる  
山の神の石碑の注連縄